

# 貨幣価値の見極め：18世紀英国文学の理解のために

藤 井 哲

## はじめに

川本三郎がある映画監督を評した文章のなかで、「成瀬巳喜男にとって、庶民の日常はつねに金勘定と共にある。…小市民の暮しはいつも金をめぐって波風が立つ。…小市民の暮しの根底にあるのは、情や義理もさることながら、金だ…」という一節が目にとまった<sup>1</sup>。同じような発想を18世紀英国文学を読み解く際のひとつの視点として設定できないであろうかと考えた。とりわけ18世紀の英国小説では、「つねに金勘定と共にある」ところの小市民たちが多く登場するし、彼等の生き様が作品の主たる素材を提供していたし、そうした小説の当時の読者たちもまた多くは庶民であったことに重なり合ってくるように思えたからである。すなわち21世紀に生活する我々にとって、登場人物たちの金銭感覚を推定し仮想体験してみることが、18世紀の文学作品を理解し享受するために有効なひとつの手段になるだろうと思うのである。

しかるに、18世紀当時の英国での諸物価や貨幣価値を推定してみるだけの知識を現代日本人である我々は持ち合わせているであろうか。実のところ同じ英語圏のアメリカにおいてさえ、読書人たちのこの方面への知識は曖昧模糊の領域に迷い込んでいるようである。例えば、アメリカ人向けにヴィクトリア朝時代の英国風俗や習慣を解説したある書籍の冒頭で、著者 Daniel Pool は次のように指摘しなければならなかった。

「ギニー、シリング、半ペンス。おまえはこれが何か知っているかね」とミスター・ドンビーは息子のポールに尋ねる。ディケンズによれば、ポールはそれを知っていることになっている。ところが現代の平均的読者がそれほど物知りであるとは限らない<sup>2</sup>。

なるほど£ 1 (pound) = 20s (shillings) = 240d (pence) では、十進法と二十進法と十二進法とが混ざり合っていて馴染みにくいこと甚だしい。£ 1 を三人で分けられて便利ではないかと負け惜しみを言っていた£sd (LSD) システムの当のお膝元ですらが、1971年以降は通貨単位を£ 1 = 100p (new pence) に切り替えざるを得なくなり、それから既に三分の一世紀の時が経過しており、今

<sup>1</sup> 川本三郎「お金をめぐる物語」『図書』（岩波書店）2005年2月号，p. 6.

<sup>2</sup> ダニエル・プール/片岡信（訳）『19世紀のロンドンはどんな匂いがしたのだろうか』（1993/青土社，1997），p. 21.

日かつての£sdを計算ができる人間がいるとすれば恐らくその人は英国においてさえ博識者の部類に入るであろう。それが東洋の読者にとってみれば、£sdシステムという存在そのものが関わりを持ちたくない厄介事になってしまったとしても、それは無理からぬことであろう。

つまり、ある金額がテキストに言及されたとき、それがその場面でどれほどの価値を有する金額として作者により言及されたのか、また当時の読者の眼にそれがどれほどの購買力として映っていたのかを、想像し実感できる日本の読者は、いや研究者を含めてでも、そうはいないであろう。そこで、「そんな無関心さで作品を理解できるものか」とまでは極言しないにしても、「そのような知識が作品の理解を援ける場合もあるのではないか」というポジティブな着想が、本論を執筆するに至る発端となったのである。

以下の章では、英国の通貨制度にまつわる歴史的事実を確認し、そうした知識を18世紀の英国文学とりわけ小説のテキストに投影させることで、18世紀英文学の理解のための一手段を提唱するものである。

## 1. 邦貨への換算の問題点

ひょっとして我が国においても、多少は慎重な読者ならば一昔前の英国小説を読むにあたっては、「£1 = 20sで、1s = 12dで、現在(2006年)の換算レートは200円少々だから、それを数倍にしたくらいの値打ちがあろうから…」と読み替えてきたであろう。そしてそれで何となく事足りりとして済ましてきたであろう。時代々々の翻訳にもそうした姿勢が記録されている事例が多いと言えよう。その結果各訳者各様に換算が試みられては、それが時とともに陳腐化していくに任されてきたのである。

例えば、『シャーロック・ホームズ：ガス燈に浮かぶその生涯』に添えられた訳者による「英国の貨幣制度と当時の物価」は、Sherlock Holmesの物語の処々に言及された金額と諸物価の記録を踏まえて、1882～1901年の£1の購買力がおよそ¥12,000に相当すると算出していた。<sup>3</sup> この訳書が刊行されたのは1977年であるから、¥12,000といっても2006年現在のそれのことではない。その換算の試みから四半世紀経った2001年刊行の『シャーロック・ホームズ大事典』では、1877～1903年での貨幣価値を£1 ≡ ¥24,000と換算している。私などもヴィクトリア朝の小説を読んでいて、£1 ≡ ¥24,000ならば2006年の時点でも納得できる数字であろうとの印象を得ている。<sup>4</sup>

<sup>3</sup> W. S. ベアリング＝ゲールド／小林司と東山あかね(訳)『シャーロック・ホームズ：ガス燈に浮かぶその生涯』(1962／講談社, 1977), 巻末pp. 31-32.

<sup>4</sup> 小林司・東山あかね(編)『シャーロック・ホームズ大事典』(東京堂出版, 2001)所収の渡辺峯樹「物価」(pp. 703-705)に拠る。ちなみに荒正人『漱石研究年表』(集英社, 1974)によると、文部省の夏目金之助宛明治33年6月20日の辞令に「英国留学中一箇年千八百円ノ割ヲ以テ学資ヲ給ス」(p. 139)とあった。明治30(1897)～43(1910)年発行の¥10の金貨と£1の金貨とはほぼ同重量であったから、£1 = ¥24,000の換算でいけば、彼の滞在費は¥1,800 ≡ £180 ≡ ¥4,320,000と見積ることができる。これは1年分の滞在費としては、今日我々が支給される在外研究費用に照らしてみても、中の上くらいにランク付けできるであろう。そうすると、出口保夫が『物語大英博物館』(中央公論新社, 2005)で、「…留学費は180ポンドであった。従来の漱石研究者たちの間ではロンドンの漱石が生活苦にあえいでいたようにみなしているが、…漱石研究者たちがいかに当時のイギリス社会の経済事情に無知だったかがわかるだろう」(p. 161)と指摘していることの妥当性が判ってくる。

事程左様に、1977年での換算値が2006年において説得力を失ってしまったように、£1 ≙ ¥24,000の換算値でさえも数十年後には確実に役に立たなくなってしまう。次に引用する「1ポンドで何が買えるか」と題された随筆の一節にも、邦貨に換算することの危うさを如実に示している。

日本の千円も、使いでがなかったと覚えているが、イギリスの1ポンドも、使いでがあるとは言いかねる。1ポンドは、昔、十円であった。1ポンドが十円のころは、日本の十円も相当のものであった。1ポンドも、相当な値打ちがあった。<sup>5</sup>

これを読んだところで、どの時代の「1ポンド」で、どの時代の「十円」なり「千円」のことかを特定できなければ、何の情報も得られない。たとえ時代を確認できたとしても、今度はそれぞれの時代における「千円」と「十円」の値打ちを実感できないことには、やはり「1ポンド」の値打ちの変遷の実態は伝わってこない。つまり「十円」や「千円」を現代向けに再換算しなくては、この文の理解は不可能に近いのである。もしこのような言及が作品のテキストの読み解きを踏まえた論考においてなされるようなことがあれば、そこでの数字は将来その論考を読む者に対して再換算の手間を掛けさせることになろう。そして再換算するにしても、概算値のそのまた概算という曖昧さを二乗したような結果しか得られないことになろう。故に一旦邦貨への換算値が示されてしまうと、その数値は時代を下るにつれてその時々のお金の実態から乖離していかざるを得なくなるのである。

しかも貨幣価値を換算しようとする、作品が設定する時代のどの物品の価格に照らして導き出すかによって数値も異なってくるので、換算作業はなかなかやっかいである。季節毎の旬の農作物や粗末な生活必需品などの価格を算定基準に取り入れれば、庶民の物価感覚を踏まえた換算値を得られるであろうし、そうした視点での換算こそが説得力を持ってくる場面もあるであろう。例えば Defoe の *Colonel Jack* (1722) に、London に徘徊する二人の食べ盛りの掏摸が碗飯振舞をしたという、次のような一節が見られる。

...we treated ourselves Nobly, and as I thought with my self we began to live like Gentlemen, for we had Three-penny-worth of boil'd Beef, Two-penny-worth of Pudding, a penny Brick, (as they call it, or Loaf) and a whole Pint of strong Beer, which was seven Pence in all.<sup>6</sup>

あるいは、こうした例も挙げられる。1739年9月に London へ向けて旅立った主人公 Roderick Random と彼の従者 Strap とが Newcastle を南下したある村で宿屋に一泊するが、翌朝になって宿代 8s-7d を請求されて吃驚仰天する場面である。二人に示された明細書には次のように書かれている。

<sup>5</sup> 成田成壽『イギリス娘：ヨーロッパ紀行』（研究社出版、1955）、p. 88.

<sup>6</sup> Daniel Defoe, *Colonel Jack* (1722; Oxford University Press, 1989), p. 15. 時代設定は Charles II 世（在位 1660-1685）頃ながら、後述するように、物価においては18世紀当時と大差なかった。

	s.	d.
To bread and bear	0	6
To a fowl and sausages	2	6
To four bottles quadrim	2	0
To fire and tobacco	0	7
To lodging	2	0
To breakfast	1	0
	8	7

これがどれほどに法外な請求なのかを、現代の読者にはなかなか実感し難いはずである。Strapの弁によれば、相場の3倍を支払われたことになっている。<sup>7</sup> このような数字を抛り処にすれば、貧乏旅行を強いられるとはいっても宿代の支出は負担し得る程度の階層の庶民的物価感覚を推し量れるであろう。その例に照らすならば、1742年における従僕としてのJoseph Andrewsの年俸£8<sup>8</sup>、あるいは1739年にLondonの鬘屋に雇われたStrapの週給5s(年収に換算すれば£13)は、<sup>9</sup> 当事者たちの眼には必ずしも非常識な低賃金には見えなかったかもしれないのである。つまり贅沢品を望むべくもない階層が最低限の生活を維持するための物品から弾き出された物価感覚が、そして英国民の大多数に刷り込まれていた物価感覚がいっぽうにおいて存在していたということである。すなわち国民の大多数が中流の上レベルの文化的生活を送っていると信じられている今日の日本で国民一般に共有されている生活感覚よりも貧しい生活に蠢く人々の物価感覚があったことを忘れてはならないのである。

そのいっぽうで、高級衣料品や宝飾類のような物品から弾き出される物価というのもあった。それぞれの時代における素材の稀少性や製造技術の進歩次第でそれら贅沢品の製造コストは大きく変動したであろうし、同じ物品を販売しても、売価が買い手の懐具合に応じて決められたり青天井だったりすることもあったろう。

であるとすれば、当時の人間は大多数が庶民として生活必需品を基準にした切実な物価感覚を砥ぎ澄ませていたであろうし、生活苦とは無縁なそして不要不急の贅沢品の購買に慣らされていた階層のための物価感覚の存在を考慮した二重構造を想定してみるのが便利であるかもしれない。例えば、Scotlandに旅行したあるEngland人による次の報告も、人々の物価感覚が内包させている二重構造の存在を垣間見させているのではなかろうか。

<sup>7</sup> Tobias Smollett, *Roderick Random* (1748), Chapter X.

<sup>8</sup> Henry Fielding, *Joseph Andrews* (1742), Book I, Chapter X.

<sup>9</sup> Tobias Smollett, *Roderick Random* (1748), Chapter XV.

In Scotland the necessaries of life are easily procured, but superfluities and elegancies are of the same price at least as in England, and therefore may be considered as much dearer.<sup>10</sup>

これは何も18世紀に限られたことでもなかろうが、18世紀当時にあつては階級を識別するための手段は、品性でも知性でもなく先ずは服装であつた。そうしたルールから逸脱した身なりをしていたMrs Watersは当然のことながら宿屋の女将から乞食扱いされることになつたし、また彼女が紳士階級たる大尉の夫人であると知らされて女将は“...how should I have imagined that a Lady of your Fashion would appear in such a Dress?”<sup>11</sup>と当惑させられることになつたのである。こうした誤解を招かぬよう、紳士階級や上流階級は格式に応じた外見を保つべく服飾品に対して、庶民生活の金銭感覚では想像もつかないほどの高額の出費を強いられていたはずである。

*Tom Jones* (1749)のなかで、娘のSophiaに好きな小間物でも買えとボンと£100の小遣いを与えたのは、年収が£3,000あるSquire Westernであつた。借金でピーピーしてSamuel Johnson (1709-1784)に面倒を掛けていたOliver Goldsmith (?1730-1774)にしてさえが、1760年代には仕立屋への払いを年に£50~£100も溜めていた。<sup>12</sup>あるいは、焦らし戦術の効あつて小間使いから玉の輿に乗つた後のPamelaが小遣いとして1年に£200を支給されたように、紳士階級以上の物価感覚はそれぞれの収入の規模に応じて形成され、その幅が極めて広がつたこともまた考慮しなければならないはずである。

やはり*Tom Jones*のなかには、Squire Allworthyが孤児から育てたTomに対して年金£500と一時金£1,000とを遺贈する場面があつたり(Book V, Chapter VII), Allworthyの甥Blifilが偽善者であると知つたあとの伯父が廃嫡した甥にしぶしぶ認めた年金は£200であつたが、それでは足りなかつたとTomが£100を上乗せしてやる場面もある(Book XVIII, Chapter XIII)。そのいっぽうでAllworthyは、下宿経営の寡婦Mrs Millerに年金£50を(Book XIV, Chapter V)、物語の大団円を導いた功労者Mrs Watersに年金£60を与へたし(Book XVIII, Chapter XIII)、Tomのほうでも放浪生活で苦楽を共にしたPartridgeに£50の年金を与へている(Book XVIII, Chapter

<sup>10</sup> Samuel Johnson, *A Journey to the Western Islands of Scotland* (1775; Yale University Press, 1971), p. 11. この引用が暗示しているように、地域による物価の差もまた考慮されるべき問題かもしれないが、地域差が現れ易いのは贅沢品においてよりも農産物など生活必需品においてであらうことも予想できよう。もっとも、生活必需品の価格差は単価が低いだけに顕著な差として浮上してきにくい部分ではあるし、地域別生活物価の比較といった微視的な考察は本論の手に負えるところでも意図するところでもない。

<sup>11</sup> Henry Fielding, *Tom Jones* (1749), Book IX, Chapter IV.

<sup>12</sup> John Burnett, *A History of the Cost of Living* (1969; Gregg Revivals, 1993), p. 145. ちなみに*Roderick Random* (Chapter XVI)には、“each of these shirts is worth sixteen shillings at a moderate computation”とある。

<sup>13</sup> “‘And this,’ said he, ‘lies in very small compass: for I will allow you two hundred pounds a year... for your own use...’” Samuel Richardson, *Pamela* (1740; London: Dent, 1914), p. 329 (Saturday, Seven o'clock in the Evening). Pamelaの1年間の小遣いは、1913年に女中奉公に上がったウィニフレッド・グレースの給金(週1s)の77年分になる。シルヴィア・マーロウ/徳岡孝夫(訳)『イギリスのある女中の生涯』(1991/草思社, 1994), p. 112.

XIII). こうした数字にも階級別の物価感覚の反映を見ることができであろう。先述の Pool (pp. 22-23) が1800~1853年当時の£1の価値を換算する際に1990年における\$20~\$200に相当しようかと妙に幅を持たせたのも、<sup>14</sup> こうした階級別に抱かれていた物価感覚の差を考慮したからではなからうか。

19世紀での物価の換算値にしてからこれほど大きな幅を生じさせるくらいであるから、18世紀ともなれば更に時代が離れているだけに、それなりの覚悟をしてテキストに臨む必要がある。産業革命は生産技術の改良と製造コストの低下と消費の拡大とをもたらせたが、<sup>15</sup> それを経験する以前の18世紀の物価を考える際には、儉しい生活を強いられていた庶民感覚での物価と高額の高級品に慣らされていた階層の物価感覚という二重構造への複眼的視点を忘れてはならない。つまり英文学作品のテキストでなされた金額についての言及を理解するに際しては、個々の言及にその階級的背景を常に勘案しなくてはならないということである。

ところが多くの読者は、 $£1 = 20s = 240d$ の等式と、18世紀の£1が現在の何倍かの値打ちがあるだろうくらいの認識までに留まっていて、作品中に何等かの金額が言及されたときに、それが文脈のなかでどれほどの価値として発信され当時の読者にどう受け取られていたかを想像することもなくまた実感もできぬままにテキストを読み飛ばしているのではなからうか。たとえば Fielding が *Joseph Andrews* (1742) で Adams 牧師の報酬に触れている次の箇所到我々が遭遇したとき、

His Virtue and his other Qualifications, as they rendered him equal to his Office, so they made him an agreeable and valuable Companion, and had so much endeared and well recommended him to a Bishop, that at the Age of Fifty, he was provided with a handsome Income of twenty-three Pounds a Year; which, however, he could not make any great Figure with: because he lived in a dear Country, and was a little incumbered with a Wife and six Children.<sup>16</sup>

額面通りに受け取れば、£23は“a handsome Income”であるにもかかわらず8人家族には余裕の持てない収入であったと読める。聖職者たる者への1742年時点での年俸として£23が本当に“a handsome Income”であったかどうかを判断できなければ、我々は Fielding がこの金額に込めた真意を読み取れないのではなからうか。

<sup>14</sup> 換算における幅の広さは我が国の文献において一層増幅されることになる。例えば、海保真(訳)『ロビンソン・クルーソー』(岩波少年文庫, 2004)は「当時の1ポンドは、現在の1万6000円ということになります」(p. 340)と解説し、小林章夫『召使いたちの大英帝国』(洋泉社, 2005)は18世紀における「60ポンドという年収は、現在なら1千万円をゆうに超えるものと言えるだろう」(p. 71)としている。

<sup>15</sup> 一般的には1760年代の綿工業の技術革新から始まり、輸送手段が運河から鉄道に移行し始める1830年代にいちおう終わったとされているが、この時期の経済成長を疑問視する動きもある。松村越(他著)『英米史辞典』(研究社, 2000), p. 358.

<sup>16</sup> Henry Fielding, *Joseph Andrews* (1742), Book I, Chapter III.

## 2. 18世紀英国における貨幣の量目と品位

貨幣単位ではなくせに小説の登場人物たちが口にする事の多い guinea 金貨は、もともと英国造幣局 (Royal Mint) により西アフリカのギニアから輸入された金を素材にして、本位貨幣である銀貨 20s. と交換し得る重量の金地金を含んだ商品として 1663 年に鑄造され始めた、いわば代用貨幣であった。<sup>17</sup> その後 1670 年に 1 guinea の金貨は 22 金 (carats) の金  $129\frac{1}{2}$  grains ( $0.0648\text{g} \times 129\frac{1}{2} \approx 8.4\text{g}$ ) のものに改められた。そもそも guinea 金貨とは、英国が正式に金本位制に移行した 1816 年より以前にあっては厳密な意味での法定通貨ではなかったから、金の地金価格の変動に影響されて銀貨との交換比率が不安定な状態にあった。しかも慢性的な銀貨の供給不足から、縁が切り取られた削損銀貨ばかりが市場に蔓延することになり、それとともに guinea 金貨も重量不足の銀貨に対する価値を上昇させる傾向にあって、1695 年には 1 guinea 金貨が銀貨 29s 相当の通用力を有するに至っていた。こうした状況を憂慮した John Locke (1632-1704) の提案により、銀貨の大改鑄が 1696 年に施行された結果、状態の良い小額銀貨が流通するようになり、金貨対銀貨の交換比率をめぐる混乱も終息を見るようになった。

そして 1717 年には、1699 年らい造幣局 (1709~1816 年には The Tower of London に設置されていた) の長官を勤めていた Isaac Newton (1642-1727) の助言により<sup>18</sup>、金の法定価格が 1 oz (ounce, 31.103g) = £3-17s-10 $\frac{1}{2}$ d に固定されるようになり、1 guinea 金貨も政府により 21s と固定化され、22 金 8.4g = 1 guinea = 銀貨 21s という量目が、以来数値を変えることなく 1816 年まで維持されることになった。すなわち 1717~1815 年の一世紀間、英国の通貨制度は実質的なそして安定的な金銀複本位制度 (bi-metallism) のもとにあったのである。

英国では、慢性的な銀貨不足に悩まされていた 18 世紀を通してずっと金貨が盛んに用いられており、英文学作品のテキストを読んでも銀貨を前提にした “pounds”<sup>19</sup> と同じくらい頻繁に金貨を前提にした “guineas” の表現に遭遇する。社会の金貨に対する切実な需要を反映させてであろうか、

5 guineas 金貨	→ 1668~1753年鑄造	……………	£5-5s 相当
2 guineas 金貨	→ 1664~1753年鑄造	……………	£2-2s 相当
1 guinea 金貨	→ 1663~1799 (+1813)年鑄造	……	£1-1s 相当
half guinea 金貨	→ 1669~1813年鑄造	……………	10s-6d 相当
third guinea 金貨	→ 1697~1813年鑄造	……………	7s 相当
quarter guinea 金貨	→ 1718&1762年鑄造	……………	5s-3d 相当

<sup>17</sup> 当初の 7 年間に鑄造された 1 guinea 金貨には 22 金 (品位 0.9167) で  $131\frac{3}{4}$  grains ( $0.0648\text{g} \times 131\frac{3}{4} \approx 8.54\text{g}$ ) の重量があった。

<sup>18</sup> 「1717 年 12 月 22 日に、イギリス政府が 1 ギニー金貨を銀 21 シリングに定めたのも造幣局長官ニュートンの助言による。これによってイギリスは事実上、金本位制の国になった。…ニュートンの定めた金銀の比率は、かれの宇宙体系と同じくらい永続したのである。」 島尾永康『ニュートン』(岩波新書, 1979), p. 135.

<sup>19</sup> 18 世紀を通して金貨は guinea 単位であり、£1 金貨と称するものは存在しなかった。1817 年になって、guinea 金貨と入れ代わりに pound 金貨 (sovereign) が鑄造されるようになったのである。

といったように、金貨は18世紀を通して恒常的に鑄造されるようになったのである。

いっぽう当時最大重量の銀貨は5s相当の“crown”と呼ばれる貨幣であった。もともとは金貨だったcrownは、Elizabeth I世の時代から銀480gr(grains)すなわち1 troy ounce(31.103g)の重量があり60d(=5s)に相当する銀貨と入れ代えられ始め、掌にシックリ納まるその大きさ(直径約4cm)が好まれたせいか、品位0.925の銀すなわちsterling silver(stg)で1ozという規格の銀貨として流通・定着するようになった。しかし金銀複本位制による固定相場のせいで金に対して定められた英国での銀価格が大陸での銀価格を下回ってしまい、それに伴う輸入超過、大陸駐屯の英軍への支出等により、銀が大量に海外に流出し続け、18世紀を通して英国内での銀不足に拍車が掛かっていった。その結果発行しても潰されてしまうcrown銀貨は1751年を最後に鑄造されなくなり、1816年に金本位制に一本化され、銀貨が補助貨幣に位置付けられるまで、crown銀貨の鑄造は再開されることがなかった。

1 penny銀貨は、もともと8世紀に大陸で重量1 troy pound(libra, lb)の銀地金から240枚の銀貨を鑄造し、古代ローマのdenariusに倣って $22\frac{1}{2}$ gr(14.58g)重量のdenier貨として通用させたものに由来する。<sup>20</sup> それをKent王のOffa(757-796)が英国に普及させて、poundの単位記号としてlibraを略記した $\text{£}$ に、pennyにはdという記号を用いるようになった。その後もpenny銀貨は品位や重量を落しながら鑄造され続けたが、1601年になって1 penny銀貨はsterling silverで8gr(約0.52g)として定着し、その規格が1820年までほぼ踏襲されることになった。

Shillingという単位は古代ローマのsolidusに由来し(ゆえに単位記号はs)、銀貨として定着したのはEdward VI世の治世(1547-1553)からであった。銀本位性のもとで12dに相当させた1 shilling銀貨の重量は1 penny銀貨の12倍あることとされ、1 shilling銀貨5枚あるいはcrown銀貨1枚で1ozの銀地金を購入できることを保証していた。そのことは*The Vicar of Wakefield*に登場するPrimrose牧師夫人が詐欺師に掴まされた“a gross of green spectacles, with silver rims”に呆れて“at the rate of broken silver, five shillings an ounce”とほやく場面でも裏付けられよう。<sup>21</sup> そして*Tom Jones*のなかでも、SophiaのPocket-Bookについて“the real Value of the Silver, which it contained in its Clasp, was about 18d.”と読んだときに、<sup>22</sup>使われている銀の重量が9gあったことが判るようになるのである。通貨の額面=含有地金の価値との原則はどの額面の銀貨にも適用されていたからである。

しかし現実には市中に流通する銀貨は不足がちで、それは同じく*The Vicar of Wakefield*における

...he [the old gentleman] entertained me with a pathetic harangue on the great scarcity of silver. .... Abraham returned to inform us, that he had been over the whole fair, and could not get change, though he had offered half-a-crown for doing it [a thirty pound note].” (Chapter XIV)

<sup>20</sup> 計算上では $22.5\text{gr} \times 0.0648 \times 240 = 349.92\text{g}$ となり、1 troy pound(1 lb = 373.25g)より6%少ないが、鑄造費用を差し引いた結果なのかもしれない。

<sup>21</sup> Oliver Goldsmith, *The Vicar of Wakefield* (1766), Chapter XII.

<sup>22</sup> Henry Fielding, *Tom Jones* (1749), Book XII, Chapter IV.



という一節からも窺われるように、深刻な状況にあったようである。銀貨の不足は以下に示す18世紀における銀貨の鑄造状況からも裏付けられる。

Crown 銀貨(5s)が1751年に鑄造を停止

Half-crown 銀貨(2s-6d) → 1751年鑄造停止

1 shilling 銀貨 → 1787年鑄造停止(但し1798年に追加鑄造)

6 d 銀貨 → 1787年鑄造停止

3 d 銀貨 → 1800年鑄造停止

2 d 銀貨 → 1800年鑄造停止

重量が $\frac{1}{60}$ ozしかない1d銀貨ですら1800年には鑄造が停止されてしまった。

必然的に各種の quinea 金貨のほか各地の銀行が発行する bank-notes<sup>23</sup> が18世紀を通して盛んに流通するようになり、1797年には Bank of England がスペイン銀貨を輸入して独自の刻印を打った臨時通貨(bank dollar)を導入したり<sup>24</sup>、銅で penny 貨を鑄造しなくてはならないこともあった<sup>25</sup>。

結局1816年になると、銀貨不足を招いた複本位制は放棄され、英国に金本位制(gold standard)が導入されたことにともない、補助貨幣としての銀貨は地金相場を反映した重量での鑄造がしやすくなった。そしてこの時の制度変更に合わせて21s相当の guinea 金貨は廃止され、22金 $123\frac{1}{4}$ gr(約7.99g)で20sに相当する sovereign 金貨が1817年から発行されるようになった。しかし1931年になって金本位制が廃止されると金貨が英国の市場から姿を消してしまうことになる。

本章の最後に、金銀複本位制のもとで固定されていた金銀比価を計算しておこう。この比価は鉱物資源の採掘技術や生産量が飛躍的に増大する近代以前にあっては、有史いらい似たような数値で推移してきていたが、英国にあっては次の数値が18世紀を通して一定していたことになる。すなわち、21s相当の guinea 金貨の含有する純金は $8.4\text{g} \times 0.9167 = 7.7\text{g}$ で、21s=252dの銀貨に含まれる純銀は $0.52\text{g} \times 0.925 \times 252 = 121.21\text{g}$ で、金銀比価は通貨の重量の単純計算で1対15.74と算出されることになる。<sup>26</sup>

<sup>23</sup> 1694年創業の Bank of England と、London 内外の個人銀行(1803~1810年には約550行あった)とが、主に£20以上の銀行券を個々に発行し、18世紀を通して盛んに流通させていた。Tom Jones が旅に携行した£500は、金貨にすれば4kgにもなるから、当然 bank-note であった。だから紛失しても気付かなかったのである。Sohpia が父親からもらった£100もやはり bank-note であった。

<sup>24</sup> 1797年にスペインの dollar 銀貨が4s-9d 通用として£500,000分発行されたが、偽造硬貨が多く混入していたので、半年で回収された。

<sup>25</sup> 公式の2d銅貨や1d銅貨が1797年になって鑄造されたが、銀貨の場合と同様に額面を含有地金価値で裏付けようとの発想から、それぞれ重量が57gと28gにもなり、不評であった。

<sup>26</sup> 「現在ギニー貨は銀貨の21シリング6ペンスで通用しているので、金は今では銀のおよそ15倍半の価値がある」(p. 156). ジョン・ロック/田中正司・竹本洋(訳)『利子・貨幣論』(東京大学出版会, 1978)所収の「わが国の鑄貨の引上げについて」(1692)より。

### 3. 換算の試み

18世紀の英文学作品に言及される金額がそれぞれの場面においてどのくらいの価値を示唆していたものか、また当時の読者によってどれほどの購買力として受け取られていたものか、今日の読者が想像するためのひとつ方法を提案してみたい。すなわち前章で確認した歴史的事実としては、18世紀における英国の通貨は金銀の地金価値にほぼ等しい購買力を持ち、1d銀貨は純銀0.48gを含み、1 guinea金貨は7.7gの純金をもって鑄造されていたから純金約7.33gで£1相当であったということ、金銀比価は重量にして1対15.74になり、その数値に基づいた複本位制が維持されていたこと、以上のすべてが18世紀の全期間においてあてはまることなのである。

ゆえに、玉の輿に乗ったPamelaの小遣いが年£200だったのなら、それが18世紀のどの時期にことであっても7.33g×200の計算で純金約1.5kg相当の小遣いだったことになるし、*Vicar of Wakefield* (Chapter XII)においてPrimrose牧師夫人が地主からの走り使いに見栄を張って弾んだ7½dのチップは0.48g×7.5すなわち純銀3.6gと同等の購買力があったということになる。このような読み替えが18世紀全体を通して通用するという利点を利用すれば、言及される金額を金銀の重量を通して容易に実感し、購買力を想像しやすくなるのである。

その次の作業としては、換算しようとする時たとえば21世紀初頭における金銀の地金価格の相場を算入して金額に直してみれば、現在の購買力として実感することが可能なのではないか。まず銀の場合であるが、その地金価格は2004年1月以降で1gあたり¥25前後で推移していたから(<http://ogc.mitsui.co.jp/?OVRAW>)、仮に£1=240dに銀の地金相場を代入してみると、銀115.2g×¥25=¥2,880となる。しかしこれでは18世紀当時の£1の購買力を反映しているとは到底思えない。

次に、21世紀初頭における金の地金価格ではどうであろうか、次頁のグラフは『朝日新聞』に掲載される「東京マーケット」の土曜版から毎金曜日の金価格を2001年1月～2006年7月下旬に拾ったものである。毎日のデータの連続ではないので上下の振れが目立つが、5年半に渡って相場の推移を展望できるであろう。これによると、21世紀の第一年目の価格は前代未聞の安値であったことが判る。<sup>27</sup> いっぽう2005年後半以降の暴騰と乱高下は、それまでの安定的推移とは様相を異にした尋常ならざる荒れ模様なので、ここ数年間のための換算用基準値に組み込むのは早急に過ぎるであろう。<sup>28</sup>

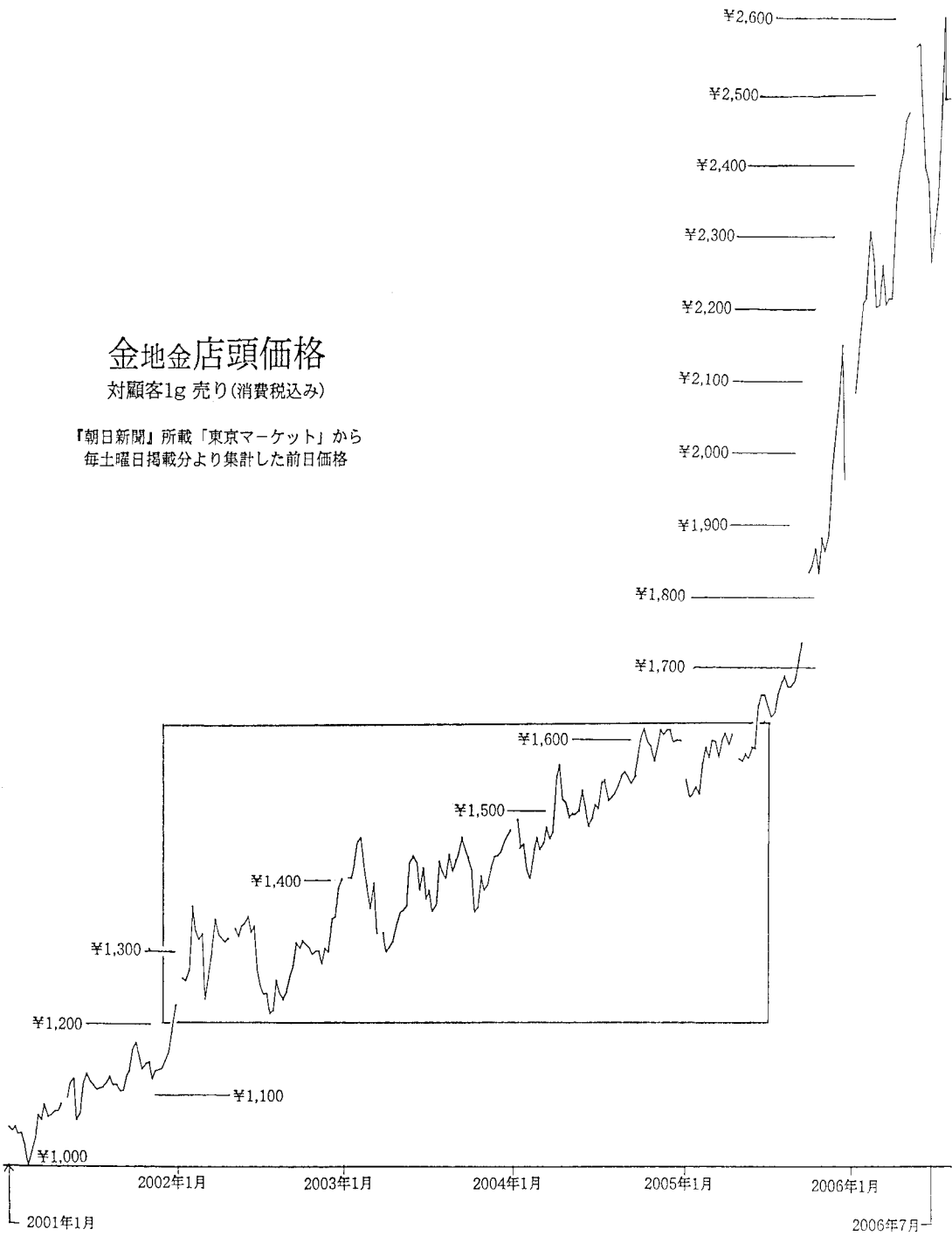
<sup>27</sup> 江守哲の『新投資術：注目の貴金属投資』（綜合法令、1999）によると、戦後において日本での金価格の最安値は1995年4月19日の1g=¥1,019であったが(p.99)、それが2001年に更新されたことになる。

<sup>28</sup> 『朝日新聞』の2006年6月26日に掲載された広告記事「豊島逸男のゴールド・トーク」によると、金価格上昇の要因として、原油高、イラク・イラン情勢、ドル離れ、オイルマネー、中央銀行の金購入、企業の信用リスク増大、年金基金の参入が考えられる由である。また江守哲の上掲書(p.97)によると、1980年1月21日に¥6,495の最高値を記録したこともあるそうなので、上記要因が解消されなければ金価格は高値で安定することも考えられる。そうすると、本稿で提唱している金価格の扱い様に多少の修正を加える必要が出てくるかもしれない。

## 金地金店頭価格

対顧客1g 売り(消費税込み)

『朝日新聞』所載「東京マーケット」から  
毎土曜日掲載分より集計した前日価格



このグラフから、2002年1月～2005年6月の期間では金価格が比較的安定していて、¥1,200～¥1,600の範囲で推移してきていることが読み取れよう。そこで便宜上、金地金価格を1gあたり¥1,500と設定して考察を進めてみたい。先の $£1 = 240d$ に式に今度は金価格を代入すると、金7.33gで¥10,995になるが、そうすると $£1 = \text{金}¥10,995 = \text{銀}¥2,880$ という矛盾した数式を生じさせてしまう。現代の相場から算出される金銀比価1対60は、18世紀での1対15.74とは異なっているからである。

そこで先ず60と15.74の差異を糸口に利用してみよう。現代とは産業構造を異にする18世紀における金銀の採掘・精錬などのコストは、<sup>29</sup> 現代でのコストを大幅に上回っていたはずであるから、その上回っていた分をとりあえず現代の銀の相場に加味してもいいはずである。そのためのデータも探せば出てくるであろうが、時代や地域によりそれらの数値も振れるであろうから、ここでは牽強附会になることを承知の上で単純な操作を加えて見る。すなわち現代では銀の製造コストが18世紀におけるよりも $^{15.74}/_{60}$ しか掛からないと看做してみる。そこでコスト・ダウンされた分を上乗せするつもりで銀の相場を $^{60}/_{15.74}$ 倍にすると、銀1g $\equiv$ ¥95.3となって金銀比価1対15.74に合わせたことになり、 $£1 \equiv \text{金}¥10,995 \equiv \text{銀}¥10,968$ で等式が成り立ってくる。しかしそれでも1d $\equiv$ ¥45.7すなわち $£1 \equiv$ 約¥11,000では、ヴィクトリア朝での購買力にも遥かに及ばない換算値にしかならないので、銀の金地金相場を拠り処に取り入れる換算法は放棄することになる。

金についてもまた18世紀の純金1gに今日の¥1,500相当の購買力しかなかったとは到底考えられない。また金銀複本位制を採用していない現代の日本では金の相場と銀の相場とが固定された比率で連動しているわけではないから、銀115.2gから視点を変えて、7.33gの純金が18世紀において有していた購買力を $£1$ の価値と設定し直し、そこから換算しようとする時点における $£1$ の購買力を推定する試みをしてみよう。そして換算後の金額を240分の1にした金額を18世紀での1dに対する今日の換算額と想定してみて不自然さがなければ、銀の相場を考慮に入れる必要はなくなってくる。

具体的な方法としては、最近の金の金地金価格を何倍( $\times\alpha$ )かにして、これまでの読書経験から得られてきた18世紀当時の $£1$ の購買力についての印象に合致しそうな数値を導き出すことであると思う。そして当時のテキストでその換算額の妥当性について検証してやる必要がある。そこで先ず $£1 \equiv \text{純金}1g \text{の時価} \times \alpha \times 7.33g$ という式を建てたうえで、 $\alpha$ に入れるべき数字を決められれば、将来的にも新聞をめくって金の金地金価格をチェックするだけでその時々に通算する換算額を弾き出せる式として利用できるのではなかろうか。

問題は、 $\alpha$ をどのような数字に設定したら妥当な数値を弾き出してくれるかなのである。確実に言えそうなことは、18世紀には金の採掘・精錬のコストが現代におけるよりも遥かに多く掛かったはずだということである。その分を今日の金の価格に上積みする積もりで $\alpha$ に2, 3, 4, 5…と適当な数を代入してみて、テキストを読みながら漠然と感じてきた18世紀の $£1$ の値打ちに近いと思わ

<sup>29</sup> 脚註20で触れたように鑄造コストは軽微であつたらうし、たとえば5sで1ozの銀が買えるという本位性の建前上、鑄造コストは大体において定量貨幣という軽便さをもって相殺され得る範囲に収まっていたと考えたい。

れる換算値を捜してみてもどうであろうか。例えば両時代での生産コストの差を示唆していた<sup>60</sup>/<sub>15.74</sub>という数字は、 $\alpha$ に入るべき数字が二桁以上の数字ではなさそうなことを教えている。それならば非論理的であることは承知の上で、<sup>60</sup>/<sub>15.74</sub>を切りの良い4にして、現代の金価格を¥1,500として、18世紀の金1gには今日の約¥6,000に相当する購買力があつたと仮定してみるのである。しかも切りの良いところで、£1金貨が含有する24金7.33gを実際に近い22金8.0gのほうで計算することにする。<sup>30</sup> £1  $\equiv$  ¥1,500  $\times$  4  $\times$  8g = ¥48,000という数式が現われてくる。やや強引に導き出された換算値ではあるが、これは私が18世紀の英文学作品を読んでいて、言及される金額の購買力として得てきた印象に合致した数値になっている。しかも18世紀の£1  $\equiv$  今日の¥48,000の換算から導かれる1s  $\equiv$  ¥2,400, 1d  $\equiv$  ¥200という数字もまた奇麗に割り切れるので、本稿の第4章で18世紀英文学作品のテキストにおける金額への言及を£1  $\equiv$  ¥48,000で換算しながら検証してみ際に計算がしやすい好都合な数字となってくれる。

¥48,000があながち的外れな換算値でもなさそうなことへの裏付けとして、18世紀英文学分野の権威ある研究者の発言をここで引用しておきたい。

...it is hard to set a definitive equivalent, but reasonable guess might be that a pound in the eighteenth century was equal in purchasing power between twenty and forty United States dollars in the 1960's.<sup>31</sup>

我々は、この一節を読みながら、1960年代のアメリカの\$20～\$40を当時の日本の為替相場で換算し、それを2005年における購買力に再換算することになる。つまり1960年代はまだ\$1 = ¥360の固定相場制が採られていたから、先ず\$20～\$40 = ¥7,200～¥14,400と換算し、1960年代の日本の貨幣価値を思い起こしてみると、それは購買力にして今日の5倍前後あつたように感じられるから、£1  $\equiv$  今日の¥36,000～¥72,000と再換算されるかもしれない。そうであれば、私が算出した£1  $\equiv$  ¥48,000はなかなか説得力のある数字ということになろう。

18世紀の£1  $\equiv$  ¥金1gの時価  $\times$  4  $\times$  8gという換算式が将来においても有効であり続けることは期待したいところではある。しかし、とりわけ過去1年間における金価格の乱高下を目の当たりにさせられると、 $\alpha = 4$ に固定そして固執することは現実的な対応とは言い難く思えてくるので、 $\alpha = 4$ が恒久的に妥当な数値を弾き出し続けるかどうかについての判定は、数年後あるいは数十年後に委ねるべきかもしれない。そこで取り敢えずは、金価格の相場が異常な高値あるいは安値に推移していると認識される時期にあっては、 $\alpha = 4$ に幅を持たせて換算するのが現実的であろう。例えば最近の金価格を¥2,400前後と見るならば、£1  $\equiv$  ¥2,400  $\times$  (4-1)  $\times$  8g = ¥57,600と算出してもよいであろう。また21世紀初頭の安値相場を¥1,100前後と見て換算するならば、£1  $\equiv$  ¥1,100  $\times$  (4+1)  $\times$  8g = ¥44,000としておくのもよい。いずれの換算額にしても「1960年代のアメリカの\$20～40」に相当する購買力¥36,000～¥72,000の範囲に含まれ得るからである。そもそも

<sup>30</sup> 22金と24金の価値の差は、金貨に含有されていた銀のコストと鑄造コストとを算入すれば、僅少になるであろうし、またそうした差は地金価格の上下動にも吸収されてしまうであろう。

<sup>31</sup> Donald Greene, *The Age of Exuberance* (1970), p. 56.

求めようとしている数字自体が推定の域を出ない代物でもある故、細かい数字にこだわる必然性は全くなく、かなりの幅を持たせてでも切りの良い数字に落ち着かせておくことが、現実的対応といえるであろう。そこで以下のような換算式を建てることにした。

$$£ 1 \equiv ¥ 金 1 g \text{ の時価} \times (4 \pm 1) \times 8g^{32}$$

それではこの £ 1 ≡ ¥ 48,000 という換算値は18世紀のなかのどの時期に対して有効なのであろうか。換言するならば、18世紀を通して英国での物価の変動はどの様だったのであろうか。そうした疑問に対しては、清教徒革命が終焉した1660年から産業革命期に入る1760年までの英国において考慮を殊更に必要とするほどの物価の変動がほとんどなかったこと、つまり上記の換算値は1760年までは有効であるし、場合によっては18世紀末まで適用することさえも不可能ではなからうとの観測を示しておきたい。何故かといえば、英国における中世以来の生活物価の歴史を辿ったBurnettが、14世紀末から18世紀末までにかけての物価の推移を捉えて次のように述べているからである。<sup>33</sup>

...the period of stable prices from about 1380 to 1510 was followed by one of inflation from 1510 to 1640, to be succeeded in its turn by comparative stability again from 1640 to 1760 (p. 65).

Strangely in a century [1660-1760] of violent, even revolutionary, change, prices remained remarkably stable until almost the end of the period (pp. 131-132).

...during the period 1760-92 when food prices rose by 40 per cent and most wages lagged behind (p. 185).

これは、食料品12品目の価格調査をしたKnoop & Jones (1933)や南イングランド庶民の生活必需品で調査したBrown & Hopkins(1955, 1956)<sup>34</sup> 他による研究成果を織り込んだうえでの概観であり、1500~1650年の長期インフレ期間を経る間に物価が6~7倍に上昇したあとは、ほぼ一世紀間に渡って物価の横這い状態が続き、1760年頃からは再び物価が上昇し始めたものの、18世紀末までの上昇も40%程度にとどまっていたし、<sup>35</sup> 賃金の上昇はそれよりも鈍かったことを教えているので

<sup>32</sup> 各項は切りの良い数字に置き換えられている。所詮は概算値を求める式であるから、計算し易さ本位に式を £ 1 ≡ ¥ 金 1 g の時価 × 30前後 あるいは £ 1 ≡ ¥ 金 1 g の時価 × 24~40 と簡略化しても良いかもしれない。そして換算値そのものも12や240で割りやすい直近の数字に動かしても、さしたる不都合は生じないであろう。

<sup>33</sup> John Burnett, *A History of the Cost of Living* (1969; Gregg Revivals, 1993).

<sup>34</sup> Douglas Knoop & G. P. Jones, *The Medieval Mason* (1933).

E. H. Brown & Sheila V. Hopkins, "Seven Centuries of Building Wages," *Economica*, New Series, Vol. XXII, No. 87 (1955).

E. H. Brown & Sheila V. Hopkins, "Seven Centuries of the Prices of Consumables, Compared with Builders' Wage-Rates," *Economica*, New Series, Vol. XXIII, No. 92 (1956).

<sup>35</sup> 前述のBurnett(p. 133)によると、18世紀後半における物価上昇の原因は、1765-1768, 1772-1775, 1782-1785年の長期的凶作、七年戦争(1756-1763)や対米戦争(1775-1781)、消費の拡大と人口増加にあったらしい。

ある。<sup>36</sup>

何かと参考になるので、Brown & Hopkins(1955, 1956)による生活必需品の価格調査結果をBurnett(pp. 60-61, 132, 198-199)から読み出して、孫引きしておきたい。すなわち物価安定期最後の時期1451~1475年を100とするならば、

1500	= 100
1510-1521	= 167
1522-1542	= ~150~
1549	= 214
1555	= 270
1556	= 370
1557	= 409
1570	= ~300~
1580s	= ~340~
1594	= 381
1596	= 505
1597	= 685
1610-1630	= 500~
1650	= 839
1651-1680	= 600~700
1680s	= 500
1700-1709	= 591
1710-1719	= 663
1720-1729	= 608
1730-1739	= 553
1740-1749	= 599
1750-1759	= 628
1760	= 643
1760-1769	= 704
1770-1779	= 805
1780-1789	= 824
1790	= 871
1791	= 870
1792	= 883
1793	= 908
1794	= 978
1795	= 1091
1796	= 1161
1797	= 1045
1798	= 1022
1799	= 1148
1800	= 1567
1801	= 1751
1802	= 1348, etc.

<sup>36</sup> 国民一人あたりの平均年収は、17世紀末で£8~£9 → 1750年に£12~£13 → 1800年に£22であった。Burnett (pp. 128-129)。

というふうに、1700～1760年の物価の推移が、指数にして591から643にしか上がっていないことが判る。この間に物価が10%も上がっていないのであるから、英国での物価が驚異的安定を維持していた時期であったといえよう。1789年までを含めたとしても、1700年いらいの物価上昇率は40%の範囲に収まってきているが、しかしそれ以降はまたインフレの時代に突入してしまう。そうした物価安定期に18世紀英文学が位置していた僥倖を認識したうえで、現代の読者は当時の物価感覚を追体験し易い有利な立場にあることを慶ぶべきであろう。

#### 4. 換算値の検証

福原麟太郎はかつて「この上京当時のジョンソンは1ヶ年30ポンド(3万円)くらいで暮すことを工夫していたらしい」<sup>37</sup>と書いていた。それを讀んだ私は、いくら何でも¥30,000ではLondonで1年間生活できるはずがなかりと訝しく思ったことがある。£30≒¥30,000の生活費は、「ジョンソン大博士」が『学鏡』(丸善)に連載されていた1966～1968年当時での為替レート£1=¥1,000から機械的に換算した金額だったからである。該当箇所をBoswellの*Life of Johnson*で調べてみると、1737年の記述のなかにJohnsonの同郷人が彼に次のような助言を授けたと記録されている。

He assured Johnson... that thirty pounds a year was enough to enable a man to live there [in London] without being contemptible. He allowed ten pounds for clothes and linen. He said a man might live in a garret at eighteen pence a week... By spending three-pence in a coffee house, he might be for some hours every day in very good company; he might dine for six-pence, breakfast on bread and milk for a penny, and do without supper...<sup>38</sup>

確かに、衣料費£10、屋根裏部屋家賃18d×52週、喫茶店代3d×365日、朝食代1d×365日、昼食代6d×365日を合算すれば£30弱になる。そこで第3章で弾き出した£1≒¥48,000をここに算入してみて、そこから得られる金額が21世紀初頭の日本に生活する我々の物価感覚に沿った数字として換算されているかどうか、それがLondonで惨めな思いをしないですむレベルの生活を維持し得る生活費として我々が納得できるかどうかを試してみたい。

換算してみると、衣料費£10→¥480,000、屋根裏部屋家賃週18d×52週→¥3,600×52,<sup>39</sup> 喫茶

<sup>37</sup> 単行本化された福原麟太郎『ジョンソン』(研究社出版、1972)から引用する(p. 29)。

<sup>38</sup> G. B. Hill ed., *Boswell's Life of Johnson* (Oxford: Clarendon Press, 1934; 1971), vol. I, pp. 104-105.

<sup>39</sup> Londonに到着したRoderickとStrapはSt Martin's Laneに週2s.の部屋を借りるが、それは"...so very small, that, when the bed was let down, we were obliged to carry out every other piece of furniture that belonged to the apartment, and use the bedstead by way of chairs."といった狭さであった。その後Roderickだけで貧民窟のSt. Giles近くに屋根裏部屋を週9dで借りている。Tobias Smollett, *Roderick Random* (1748), Chapters XIII & XXI.



店代3d × 365日 → ¥600 × 365, 朝食代1d × 365日 → ¥200 × 365, 昼食代6d × 365日 → ¥1,200 × 365, 40  
 メて£30 → ¥1,440,000となった。とても裕福とまではいえないにしても、当時の生活必需品が今日よりも安価であったと仮定するならば、独身者がかつかつの生活を維持できない金額でもなさそうである。前頁での引用部分の直前箇所には、6dの肉料理、1dのパン、給仕に1dチップの出費(すなわち¥1,600)で満足すべき食事ができたというJohnsonの言葉(*Life*, vol. I, p. 103)が見られるが、それに照らしてみても、平均6dの昼食代は必ずしも過少な額ではなかったようである。<sup>41</sup>

ここでJohnson絡みの余談になるが、彼の*A Dictionary of the English Language*が1755年に二折判2巻本として発売されたとき、その売価は£4-10sであったことは知られている。すなわち£1 ≡ ¥48,000として辞書のために¥216,000を出費する感覚は、今日でなら冊子体のOEDをフルセットで購入する感覚であろうか。*Dictionary*その他の功績によりJohnsonが1762年に国王George III世(在位1760-1820)から賜ることになった年金額£300は¥14,400,000に換算され、本稿の第1章で触れたSquire Allworthyに見られる年金支給に関わる金銭感覚にも近いことから、Johnsonが紳士階級の生活レベルを維持できるだけの額であり、また生活のために執筆することから彼を解放するにじゅうぶんな金額であったことが想像できるであろう。ついでに、Johnsonが辞書を編纂したGough Square(London)のDr Johnson's Houseは新築するならば£700は掛かりそうな家屋であったと前述のBurnettは教えてくれるが(p. 176)、上物だけで¥35,000,000弱と聞けば我々にも何となくその家の構えが想像できてこようというものである。

1747年にJohnsonが*The Plan of a Dictionary*を捧げた相手であるChesterfield伯爵のもとに自ら伺候したとき、彼は£10の心付けとともに追い返されるという悔しい思いを経験していた。それがpatron制度との訣別を宣言する有名な書簡を彼に書かせることになったのであるが、Chesterfieldが包んでくれた¥480,000はJohnsonにしてみれば“so inconsiderable a sum”だったらしい。<sup>42</sup> 私などはこうした数字に直面すると、「誠に庶民の物価感覚では計り知れない別世界の金銭感覚があったのだなあ」との思いを強くさせられる。

あるいはSmollettの*Roderick Random* (Chapter XVI)に、“each of these shirts is worth sixteen shillings at a moderate computation”の一節を読んで、「シャツ1枚が¥38,400ではチト贅沢だ」と、もし感じるならば、我々現代の読者は物価の二重構造のうちの庶民的金銭感覚に近い尺度で読書していることになるのかもしれない。そうするとSophiaの小遣い£100が¥4,800,000とはいかにも法外な換算と思ってしまうのも無理はない。しかしそれこそが当時の紳士階級金銭感覚の一端であろうというふうに複眼的発想に切り換えられれば、Johnsonが*Dictionary*の編纂経費および報酬として連合したbooksellersから1,500guineas = £1,575 ≡ ¥75,600,000の支払いを受けていたことにも、また£10の心付けにJohnsonが憤ったことにも、違和感を覚えずに受け入れられるかもしれない。

<sup>40</sup> 電灯が普及する以前では、dinnerは明るい昼のうちに済まされ、夜は食べるにしても軽いsupperであった。

<sup>41</sup> *Tom Jones* (Book VIII, Chapter II)に、将校達は年収が£500はあるかのように威張るくせに注文するのは1sの定食ばかりだと、宿屋の女将がほやく場面がある。

<sup>42</sup> G. B. Hill ed., *Boswell's Life of Johnson* (Oxford: Clarendon Press, 1934; 1971), vol. I, pp. 260-265, 261n, 183. 1754年および1747年の記述より。

ちなみに Johnson が1759年に著わした道徳小説 *Rasselas* では、王子 *Rasselas* の妹の侍女 *Pekuah* がエジプトで誘拐され、王子が *Pekuah* を取り戻すために支払われた身代金は “two hundred ounces of gold” (Chapter XXXVII) であった。本稿の第2章で触れたように、18世紀の金の法定価格は 1 oz = £3-17s-10 $\frac{1}{2}$ d であったから、そこから換算される約 £780 ≒ ¥37,300,000 という金額は、“your rank to be high” (Chapter XXXVIII) と値踏みされた人質の身の代金として見れば高額すぎることはなかったであろう。

また本稿第1章の末尾では、Adams 牧師の年俸 £23 にどれくらいの購買力があり、1742年における聖職者の年俸として “a handsome Income” と言えるかどうかを問うてみたが、それをここで検証してみよう。約 ¥1,100,000 に換算される £23 は、圧倒的多数が庶民であるところの英国国民の平均的な年収に倍する額ではあっても(脚註36参照)、独り者が London で紳士としての最低限の体面を保つための金額にも満たない。それに Adams 牧師には保つべき体面よりも何よりも養うべき8人の家族があった。ところが Burnett は、18世紀始めの10,000教会区のうち5,500では聖職録が年 £50 以下であったが、18世紀末には £150 を下回る教会区は4,000に減少したと報告している(p. 172)。このことから年 £23 という年俸はまがりなりにも紳士階級の一員に分類されていた聖職者に対しての相応しい処遇であったとはいえないことになる。<sup>43</sup> ここで物価感覚の階級別二重構造を勘案しながら考察してみると、教会上層部が現場の聖職者の俸給に太っ腹を示したとされながらも、上層部は庶民向けの物価感覚を以って現場の労に報いんとしたのかもしれない。いっぽう Adams の側では、上層部は自分たちのための紳士階級の物価感覚を尺度にして現場の同僚をも遇してくれるものと楽観し、作者や読者と一緒になって “a handsome Income” に期待を寄せていたかもしれない。それが思惑の行き違いを生じさせることになり、作品に泣き笑いのペーソスを醸し出すことになるのである。

John Gay の *The Beggar's Opera* (1728) は、庶民向に Robert Walpole (1676-1745) の金権政治を諷刺して見せた ballad opera なのであるが、投獄された泥棒の英雄 MacHeath に牢番の Lockit が gentleman 仕様の足枷を売りつける場面(Act II, Scene vii)がある。Walpole が豪語したとされる “All men have their price.” を想起させる場面であるとともに、監獄の沙汰も金次第であるという一面と、MacHeath の金銭感覚とを窺わせている面白さもあるので引用しておきたい。

Mac. Those [fetters], Mr. Lockit, seem to be the heaviest of the whole set. With your leave, I should like the farther pair better.

Lockit. Lookye, captain we know what is fitter for our prisoners. When a gentleman uses me with civility, I always do the best I can to please him. —Hand them down,

<sup>43</sup> “Adam's stipend is near the bottom of the twenty- to fifty-pound scale for licensed curates authorized by an act of 1713.” Homer Goldberg ed., *Joseph Andrews* (New York: Norton, 1987), p. 19n. ちなみに *The Vicar of Wakefield* (1766) の Primrose 牧師の年俸は £35 であったが(Chapter II), 作品の次章になって £15 を加増されている。

I say. —We have them of all prices, from one guinea to ten; and 'tis fitting every gentleman should please himself.

Mac. I understand you, sir. (Gives money.) The fees here are so many, and so exorbitant, that few fortunes can bear the expense of getting off handsomely, or of dying like a gentleman.

これが紳士階級向けの相場であるならば、もういっぽうには庶民感覚の相場といったものも見られる。例えば Smollett 描くところの Roderick は借金で Marshalsea 監獄に収監されるが、雑居房を避けるために狭くみすぼらしい寝室を借りたばかりに相場の2倍も吹っ掛けられて、1週間分の使用料として何と crown 銀貨1枚(5s ≒ ¥12,000)を請求されたらしい。<sup>44</sup>

ところで1827年以前の英国の刑法では、見せしめのために厳罰主義を採っていたこともあり、12d (¥2,400)以上の盗みは法律上 grand larceny(重窃盗)と分類され、それは死刑相当の犯罪であると定められていた。<sup>45</sup>こちらのほうは紛れようもなく庶民の物価感覚を基準にして生死を分ける線引きが行われていた。ところが *Beggar's Opera* では、Walpole に擬された泥棒の元締め Peachum が重窃盗を犯してきた子分を御上に売り渡すと、ひとりにつき £40 (≒ ¥1,920,000) という紳士階級向けの物価感覚に近い金額の報奨金が法律により支給されることになっている (Act I, Scene i)。Adams 牧師への俸給の格付けにも見られたように、このような物価感覚におけるダブル・スタンダードが当時では柔軟に使い分けられていたことを、我々現代の読者は認識しておくべきであろう。

*Roxana*<sup>46</sup>では女主人公が身を持ち崩すに至った経済的背景が示されているが、言及されている金額を読み解いてみるならば、同じ Defoe の描いた登場人物でありながら、Colonel Jack とはまた違った生活レベルでの物価感覚の例に触れられて興味深い。すなわち Roxana の父親は持参金 £20,000 (≒ ¥960,000,000) を添えて15歳の彼女を London の醸造家に嫁がせたが (p. 7)、浪費家の夫は借金返済のためにこの醸造所を手放してしまうことになる。それでも £2,000~£3,000 が残ったというから豪勢なものである (p. 11)。これだけ残れば夫に快適な余生を送らせられたはずなのに (p. 12)、夫は3年でこれをすっかり食い潰した挙げ句に蒸発してしまう (p. 14)。Roxana には5人の子供と £70 (≒ ¥3,360,000) の現金しか残らなかった (p. 12)。経済的に追い詰められた Roxana は子供を里子に出したすえに家主である宝石商の愛人に身を落とすのやむなきに至った。2年後に宝石商と死別した彼女には既に £10,000 の貯えがあった (p. 65) というから凄まじいほどの強かさ振りであるが、彼女の周辺では庶民感覚からは遠くかけ離れた額の金銭が日常的にやり取りされていたということになる。

<sup>44</sup> Tobias Smollett, *Roderick Random* (1748), Chapter LXI.

<sup>45</sup> OED の “Larceny” および 田中英夫 (編) 『英米法辞典』(東京大学出版会, 1991)。

<sup>46</sup> Daniel Defoe, *Roxana: The Fortunate Mistress* (1724; Oxford University Press, 1969)。この作品は章建てがなされていない。

そして最後の換算例として、玉の輿に乗って毎年£200(≒¥9,600,000)の小遣いを支給される身分に昇った元小間使いの場合である。無給の小間使いとしてPamelaが仕えていた女主人が身罷ったあと、その息子Mr Bが心付けとして使用人たちに給金の1年分を配ることになる。そのついでにPamelaへも賜り物があるのだが…

...for he has given mourning and a year's wages to all my lady's servants, and I having no wages as yet..., he ordered the housekeeper to give me mourning with the rest; and gave me with his own hand four golden guineas, and some silver, which were in my old lady's pocket when she died....

I hope the good squire has no design; but when he has given you so much money... and, oh! that fatal word that he would be kind to you... almost kills us with fears.<sup>47</sup>

若主人が御手ずから guinea 金貨4枚と数枚の銀貨をPamelaに賜るに及んだものだから、自らの見目麗しさを大いに自認していた15歳のPamelaは透かさず若主人の下心を見抜くに至る。

読者たる我々も彼女の懸念の根拠となった4 guineas少々の購買力を現代において実感できれば、それが彼女の杞憂に過ぎなかったのかどうかを、そして作者Richardsonがその額に託した真意を判断できるのではなからうか。例によってBurnettを参照すると、18世紀の商家に働く住み込み賄い付きのmaid-of-all-workは年£2で奉公に上がって年収£4(18世紀末になると£5~£8)で登り詰めたそうであるから(pp.183-184)、4枚のguinea金貨と数枚の銀貨つまり£5に近い金額の支給は、見習いとして住まわせてもらえ食べさせてもらえれば無給でも御の字の身分のはずであった15歳のPamelaには破格の椀飯振舞を施された気分がしたはずである。

裕福な商家出のMiss Williamsを処女と思い込まされた色ぼけの判事が彼女の水揚げに大枚100guineasを支払う場面が*Roderick Random*(Chapter XXII)には見られるが、その時の取引額はおぼこな小間使いの歓心を買うのとは別のプロの世界での相場である故、Pamelaに対しては庶民向けの物価感覚が適用されてしかるべきであろう。もし15歳の美少女の手に¥240,000も握らせようものならば下心ありと疑われても当然であろうと、我が身(?)の場合になぞらえることで我々はRichardsonの意図を読み取れたことになるであろう。英国において18世紀とは主家が使用人に対して絶対的権力を行使し得た時代であったから、若主人から可愛い小間使いへの破格なプレゼントは、主家からの思し召しが示されたことに他ならなかったはずである。よって現代の読者が当時の金銭感覚を追体験するつもりでPamelaを読むならば、はやくも巻頭でこの長篇小説に漂うサスペンス感を読み取ることが可能になるのである。

<sup>47</sup> Samuel Richardson, *Pamela* (1740; London: Dent, 1914), pp. 1&3 (Letters I & II).

## おわりに

以上において考察したように、18世紀英文学のテキストちゅうに言及される金額については、それを読む時点での具体的購買力に随時換算しながらテキストを読み進めることにより、言及される金額の多寡を漠然と想像して済ませていた従来の読み方に比べてテキストの内容が一層眼前に迫ってきて、作家の意図に対する理解がより深まったと感じられる場合もこれからは増えるのではあるまいか。

過去の物価感覚を推定する作業では、どの品目の売価で比較するかで得られる数値に大いに幅が出てくるし、換算結果それ自体も時を経るとともに陳腐化することを避けられず、その都度換算をやり直さなくてはならないものである。また、1955年以降のアルミ1gの¥1硬貨と品位0.90で1.67gの金貨で流通していた明治4年の¥1の違いを知らずして近代日本文学を読もうとすることが無謀であるように、英文学を読み解く際にも時代々々における£sdシステムのもとでの貨幣の量目についての知識は不可欠なはずである。更には時代による需給バランスの偏り具合とか物価の地域的格差とか階級間のライフ・スタイルの違いなど諸々の社会的要因を勘案した物価感覚を推定することも有益であろう。

それほどに不確定的要素に溢れている換算作業であるために、その面倒臭さを予感する我々は作品を読んでもついつい不精を決め込んでしまうことになる。しかし英国の18世紀は、極めて長期間に渡って物価と貨幣の量目とが一定していた世紀だったことを再認識しなくてはならない。つまり18世紀英文学の読者たちは、他のどの世紀の作品を読む場合にもまして、容易に当時の英国の物価感覚を追体験し得るといふ、極めて恵まれた状況に居合わせているという幸運を利用しないままにしている手はないであろう。

(2006年7月)